

沖縄八重山文化研究会会報

第 201 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
事務局 沖縄県立芸術大学付属
研究所 波照間永吉研究室
那覇市首里金城町三六
〇九八八八二五〇四三



第二〇一回沖縄・八重山文化研究会（会長三木健）は、二〇〇九年五月十七日、県立芸大付属研究所内で開かれ、宮良安彦氏が「琉球歌謡語・動詞論 おもろさうし、八重山古謡を中心に」と題して発表した。宮良氏は一九三六年新川生まれ。一九六二年に琉大文理学部国語国文学科卒業、七五年に法政大学大学院を修了後千葉県市川学園の非常勤講師を勤め、八三年から那覇尚学院、沖尚高校と長く教職にあつた。かたわら、言語や民俗、文化、歴史など多方面から多くの研究成果を発表している。主な論文に、「石垣方言動詞論・動詞基本相・終止形」（『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇七年七月号）、「八重山諸島のシャーマニズム シャーマニズム的世界としての八重山のシャーマン」（『沖縄文化研究』三〇号二〇〇四）などがある。また『南島歌謡大成 八重山篇』（角川書店、一九九七年）も外間守善と共編している。

今回は、言語学が専門ではないとしながらも、琉球歌謡語動詞論の一部として、動詞の基本相である終止形について、石垣方

言やおもろさうし、八重山歌謡の語例を中心に説明した。まず最初に戦前から続くいわゆる学校文法と近年の言語学研究の進展状況、特に文法論の状況などを概略的に説明した。

動詞の基本相とかアスペクトなど専門用語は理解がむづかしく、くり返すことにならるが、ここで相、あるいはアスペクトについて説明しておこう。相/Aスペクト（aspect）とは、動詞が表す動きについて、そのさまざまな局面を「相」としてとらえた文法用語である。たとえばその動詞（動き）が肯定しているのか否定しているのか、さらに完結しているのか、継続なのか、等々である。たとえば「雨が降っている」「雨が降っていた」という場合、これまでの文法では助動詞として別にしてきた「〜ている」「〜も含めて一つの動詞としてとらえ、全体として動詞の相としてとらえ分類・定義する。

今回は動詞の基本相である終止形の用法とその具体事例をおもろさうしを中心に紹介した。

琉球歌謡語・動詞論 おもろさうし、
八重山古謡を中心に

宮良 安彦

言語学の分野には音声論・語彙論・文法の三分野がある。

文法論はさらに形態論・統括論（連語論・文論）から成り立つ。

ここでは形態論のなかでも動詞の終止形の基本相とアスペクトの用法について、琉球歌謡語のおもろさうし、および八重山古謡を中心に解説する。

動詞の活用の分類は、学校文法では江戸時代からの国学者の伝統にもとづき、未然形・連用形・終止形・・・などの分類がなされてきた。

しかしこの分類では継続相、結果相などのアスペクトの動詞の形がみえてこない。

そこには文法的に大きな欠陥がある。

日本語の文法でアスペクトが問題にされるようになったのは近年のことである。

ヨーロッパの文法では動詞の基本形およびアスペクトで肯定形、否定形とその下位分類である現在形、過去形などの分類がおこなわれて久しい。

ポルトガルの宣教師で江戸時代の初期に日本に来島した口ドリゲスや、明治時代に

日本に来島した日本語学者チエンバレンなどは、ヨーロッパの文法論による日本本土や沖縄の言語を分類することを試みた。しかしこのような分類法は日本の国文法の研究者には基本的には受け入れられなかった。

石垣方言の活用形には、

1、終止形（命令形をふくむ）

2、連用形（中止形）

3、連体形

4、接続形（条件形）

5、準名詞（動名詞）などの形がある。

これらの形は動詞の基本相およびアスペクトのどの用法にも当てはまる。

また、動詞の基本相およびアスペクトの下位区分である肯定形および否定形（学校文法でいう未然形）も、それぞれこれらの形をもっている。

また、肯定形および否定形はそれぞれ現在形および過去形をもっている。

動詞の終止形

1 基本相（肯定形・否定形）

おもろさうしおよび八重山古謡の動詞の基本相の動詞の終止形は、日本古典語とおなじく、その語尾は「う」でおわる。ただし、琉球歌謡では助辞をとまなわ

い終止形の形はあまり用いられない。八重山歌謡（民謡）をふくむ近世および近代琉球方言動詞の終止形は「ん」で終わる。

基本相終止形の用法（継続相）

動詞の基本相の終止形は次の用法をもっている。

終止形の推量の用法

終止形の命令法

終止形の禁止法

終止形の願望法

終止形の誘いかけ法

2 アスペクト（肯定形・否定形）

動詞のアスペクトには、継続（している）、結果（してある）、その他の用法がある。

琉球歌謡の動詞のアスペクトの用法には次の用法がある。

アスペクトの推量法

アスペクトの誘いかけ法

アスペクトの敬語法

備考 この解説文では紙数の関係ですべて用例文を省略した。

文化短信

八重山平和祈念資料館が十周年

「慰霊の日」前に平和教育盛ん

八重山平和祈念資料館が今年開館十周年を迎え、それを記念した企画展「マリアと戦争マリア」展が五月二十八日に始まった。島ごとに戦争マリアの被害状況を示した地図などパネル一七四点と実物資料五四点が展示されている。

同祈念館は、総額三億円規模のマリア慰事業の一環として整備され一九九九年五月に開館。糸満市にある県平和祈念資料館の分館と位置づけられた。開館以来の入館者数は年平均三九六人で、目標の五〇〇人達成には地元の来館者をいかに増やすかが課題とされている。

同館では「慰霊の日」を前に小学校や幼稚園などの平和学習が盛んに行われている。今年も延べ二十数校、一〇〇〇人余が同祈念館で戦争マリアの実相について学ぶことになりそうだ。

また、平和記念館見学意外にもさまざまな平和学習・活動が行われている。海星小学校では、四年生がこのほど「水の戦跡めぐり」を行った。同校では、平

和教育カリキュラムで「石垣島の戦跡から学ぶ」をテーマに、平和学習に積極的に取り組んでいる。

明石小学校では児童ら十七人が、平和学習の一環として川平地区でフィールドワークを行った。この日は、八重山の戦争について調査している大田静男さんを講師に招き、川平湾に残る震洋隊基地の特攻挺格納壕跡を見学。大田さんの案内で海岸を歩きながら、格納壕跡を見て回り、戦争当時の八重山の様子などの詳しい説明に、児童らは熱心に聞き入っていた。

「戦争マリア風化させず」

元教員や戦争マリアの関係者らが戦争マリアの体験を伝えていくことを目的とした「戦争マリアを語り継ぐ会」(仮称)の発足に向けた準備作業を進めている。体験者が高齢化するなか、演劇や朗読、歌などさまざまな方法を通して戦争マリアの実相を伝えていこうと試みるもので、来年は朗読劇などのイベントを開く方向で調整している。同会発足準備会の代表を務める元高校教員・玉城功一さんは「戦争マリアの体験を、体験者に代わって語る大切。子どもたちの活動として、朗読や演劇の活動を育てたい」と話す。

白保「シマフサラシ」で疫病払い

バツタなどの害虫や馬肉をバシヨウで作った小舟で海に流し、村から疫病を追い払う「シマフサラシ」がこのほど白保で行われた。かつて白保村で疫病が流行していたころ住民が馬肉で栄養をつけることを役人から許された故事にならった儀式。と畜した馬の血が腐ったことから「腐(ふさ)らし」の名があるという。儀式には公民館館長や役員、住民ら三〇人近くが出席。バシヨウの小舟に、集落内で捕らえてきたばかりのバツタやハエ、馬肉、花米、酒などを載せて祈願したあと、集落東側の海から沖へ流した。また馬の血で染めたわら縄を集落の入口三カ所に張る儀式も行った。その血が腐臭を発することによって「村全体が腐敗した」とみせかけ、疫病などの侵入を防ごうとしたという意味があるという。

与那国祖納 新しい「がん」製作

祖納では昨年の台風で損壊した「がん」が新たに製作された。「がん」は死者を収める葬祭具で、故人宅から墓地まで近親者で担いで野辺送りをする。現在ではほとんどみられないが、与那国では明治三〇年以来、葬儀形態は変わっていないという。

新刊紹介

心温まる百人余の思い出
川平永介集『歌と心』

東京で教員生活の後、八重山郷友会長や東京・八重山文化研究会の会長として、在京郷友から親しまれていた故・川平永介氏（二〇〇六年逝去、享年八七歳）の追悼文集である。しかし単なる追悼文集でもない。本書は、故人と交流のあった人たちが、その出会いやエピソードを綴った「思い出集」と、生前、東京・八重山文化研究会例会で語った「八重山小咄」、そして自身が作詞作曲した五〇曲余りの曲を収録した「わたしのユンタ」（杉本信夫監修）の三つで構成されている。本にはCD「わたしのユンタ」も付いている。

まず「思い出集」だが、なんと一七人もの人が寄稿している。その数だけを見てもいかに多くの人たちから慕われていたかが分かる。郷友はもとより、終戦直後の八重山や、一九五六年に上京し教職に就いて以後の教え子や親戚に至るまで、心温まる交流と、人情味豊かな人間像が浮かび上がる。個性的で雄渾な書を嗜み、大の酒好きとあって、これらにまつわる話題も尽きない。まさに故郷を愛し、酒を愛し、人を愛

した人ならではの、である。それにしても八重山での生活は、意外に短い。

一九一九（大正八）年登野城に生まれると、登野城小学校高等科二年の夏、一四歳で台湾にわたり、台南師範学校講習科を修了して、同地で台湾人だけの公学校の訓導をしている。一九四四年に国民学校に移るが、間もなく敗戦、八重山に引き揚げる。植民地教育に加担した自責の念から、教職への復帰を躊躇したが、周囲の要請もあり一九四八年、母校の登野城小学校に復職。翌年には戦後の学制改革で誕生した八重山高校附属中学（いわゆる「附中」）の助教諭に。五二年には八重山教育事務所勤務するなど、戦後の激動期を送る。生活が苦しく活路を見出すべく五六年に単身上京。翌年に江戸川区立篠崎小学校に本採用が決まり、家族を呼び寄せて以後の東京生活が始まる。七〇年には東京都教組江戸川支部長を務め、沖縄返還運動にもかかわっている。八〇年に長年の教師生活に終止符を打って定年退職。その後は郷友会活動や、八重山文化研究会の会長をしている。

こう見て来ると、八重山での生活よりも島外での生活がはるかに長い。しかし、不思議とそれを感じさせない。それどころか昔の八重山が化石になって、体いっぱい詰まっているかのような人である。

そんな「原八重山」の魅力を発揮したの

が「八重山小咄」である。島ムニ（方言）をまじえた絶妙な語りは、さながら八重山の「キヨンギン」（狂言）の現代版とでもいおうか。「時代を語る」「方言の妙」「傑作な人たち」などの分類で小咄が披露されているが、もつともつと残して欲しかったと今にして思う。小曲集「わたしのユンタ」も驚きである。おもと小学校の校歌があるのは知られていたが、作曲が五〇曲余もあるとは知られていない。これまで演奏される機会が無かったのである。作品は童謡調の小品から八重山のユンタ調のもの、沖縄戦の鎮魂歌「天翔り来ませ」、校歌や団体歌などがある。その歩みを見ると意外に古く、台湾時代の一九三七（昭和一二）年の「めじろ」、一九四八（昭和二三）年の「みんなのふるさと」とのしる校に遡る。どんな人の詩でも気に入ったものに出会うとすぐに作曲していたという。やはり天性の感受性の持ち主だったのだろう。

私たちの郷土には「長包以後」に限っても、すぐれた作曲がある。糸洲長良や外間永律、石島英文、戦後の仲里長宜の「若い人」（葦間列作詞）などなど。今回刊行された作品群も、これらの流れの中に位置づけられるのではないか。

（川平永介集刊行会刊、A5判、三〇九頁、非売品、問合せ ○三・三二六二・三三九二 新宿書房内・川平いつ子）